半分の世界で

rikuru

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
半分の世界で

【Ｎコード】
Ｎ６１６９Ｙ

【作者名】
ｒｉｋｕｒｕ

【あらすじ】
第２作目。大学生活２年目を平凡に送っていた田川俊は、遠距離でありながらも長年続いている彼女との恋愛関係に幸福感を確かに感じていた。しかし、ある日思いも寄らぬ事態に巻き込まれてしまい、２人の関係に大きな影響をもたらしてしまう事に。その後次々に襲いかかる非現実的な事態に田川俊は、その状態に苦悩しながらも、一つの選択を下す。

11月21日

「じゃあ、また1か月後にね」
「ああ」
その言葉を後に、「俺達」はそれぞれ帰路についた。

加島智香（かしまともか）。彼女とは高校からの付き合いで、父親の仕事の関係上地元から離れる事になり、はや4年が経っていた。
彼女は高校を卒業した直後父親の仕事場付近で就職し、持病で長期入院している母親の為に身を削る思いで働きづめの毎日を送っていた。
熱心に母親の手術代や入院費用を少しでも軽減させようと、それこそ自分の身体は二の次でかけがえのない両親の為なら自分の身を捧げるのを厭わないほど彼女は出来た人間だった。
親の為に掛け持ちでの仕事、更にボランティア活動にまで積極的な彼女は地元の住民からも好感を持たれる存在だった。
高校の時から彼女は周りの人間から慕われた存在だったが、卒業してからより一層人望の厚さに拍車がかかっていた。

そんな彼女と5年以上付き合えている俺は、幸福以外の何者でもないのかもしれない。
普段は身近にいる分実感が沸かないが、この状況を客観的に見て不幸だと思う人間はきっとどこにもいないだろう。

対する俺は彼女のように立派な人間ではなく、親の脛を齧って大学生活2年目をただ平凡に送っていた。
入学当初から一応コンビニでのアルバイトはしているものの、十分な足しにはならなかった。
そもそも実家暮らしの俺は安定した収入源は当面必要がなかった。

欲しい服は買えるし、本も買える、ゲームソフトも買える。
俺はこの生活差に後ろめたさを感じ、彼女に資金援助をしようと何度か試みた事があるが「自分の金は自分で何とかする」と突っ張られてしまった。
彼女は一度腹に決めた事は他人の意見などで覆されないタイプなので、俺が強く言っても考えを捻じ曲げないのだ。
それが魅力だと思う所もあるのだろうけど。
しかし・・・

「おい！」

「・・・・ん？」

強い呼び声によって急に現実に引き戻された。

「いつまでのろけ話聞かせるつもりだよ。もうそれ散々聞いたっつーの」

夢でも幻でもなく、その声の主は大学で知り合った友達、三井知樹（みついともき）だった。
いけないな。最近寝不足だからか、夢と現が明確に判別できない感覚に陥っている。

「ああ・・・1ヶ月ぶりに会ったからな。ちょっと浮かれてたかもしれない、すまん」

そう。「俺達」は遠距離恋愛を続けてはや4年が経過していた。
とはいえ、一般的に？遠距離恋愛？と言われるとピンからキリまであるが、そう考えると俺達はまだマシなのかもしれない。
距離にして俺の自宅から彼女のアパートまで、大凡１００キロ前後

くらいだろう。
しかし距離の問題だけではなく、相手はタイトスケジュールの中都合を合わせる必要だってある。
勿論例外というわけでもないが、俺の周りで誰かと付き合っている友達は数多いが、遠距離恋愛が続いている奴など一人もいない。
過去の話を聞けば、遠距離恋愛などやっても長続きしない、男か女どちらかが寂しさに耐えきれず最終的に浮気に走る、など失敗例ばかりを耳にタコができるほど聞いてきた。
そういった話を身近に聞いてきたのもあり、未だに不安は消えないが、彼女がその辺の女より人一倍信用できるというのもあってここまで続いているのだろう。

「でもさ」

思考している途中で、知樹は割って入るように言った。

「いくら相手がいい子でも、遠距離なんていつ終わるかわかんねーじゃん。あんまり安心しないほうがいいかもしれねーぞ？」

知樹は、いつも俺が浮かれている時にわざと不安にさせるような事を言って煽ったりする。
逆にシリアスな話をしている時は真剣に話を聞いてくれるのだが。
こいつはそういった空気の読み方に関しては上手いのかもしれない。

「いや・・・彼女は、そのへんは大丈夫だよ。第一、あの子は浮気できる性格でもないし、第一そんな暇な時間もない」

そう言うと、知樹は

「でも彼女お前に対してそんな愛情表現とかしてこないんだろ？相

手が2つ年上で大人っつっても、普通彼氏に甘えたりしてくるだろ？」

言い返そうと思ったが、寸前で言葉に詰まってしまった。

「まぁ・・・それは、そうだけど」

確かにそうだ。数年付き合っても、恐らく関係の深さは付き合い始めの頃とあまり変わっていないのかもしれない。
その当時から彼女は俺に対して愛情表現や、弱音を吐くといった事が殆どなく、こう言えば大げさかもしれないが、少し仲がいい程度の友達と接しているのと同じような立ち位置にいると思わせる。
彼女は元々高校の時から誰に対しても分け隔てなく接していて、差別する事もなければされることもなく、どんなタイプの人でも平等に接する事ができるといった人柄の良さを持っている。
しかし、これは恋愛面で言えば、あまりプラスにはならないのかもしれない。
恋愛は理不尽さ、矛盾、偏見、そういった負の要素からも成り立ってしまうものだ、と確かどこかの本に書いてあった。
つまり、俺は彼女に特別扱いをしてもらいたいのかもしれない。
でもそんな事は口に出せる事じゃないと思うし、長年付き合っていて大きな進展が見られない今、半ば断念している所もあるのかもしれない。
彼女は、俺の事を心から好きになってくれているのだろうか。

「おい、悪かったって。まあ人には色んな付き合い方があるもんな」

俺の真剣な表情を察したのか、知樹はさっきより少し言葉を軽くして言った。

「まぁ・・・そりゃ、嫌いでもない人と付き合う訳ない・・・しな」

付き合った年数だけは周りにいる友達でもトップの俺だが、関係の深さを競うなら最下位に位置するかもしれないレベルだ。
長年遠距離をしているせいか、あまり愛情を汲み取る事ができなくなっているのかもしれない。
情けないな、俺。
それに、俺こそ彼女に愛情を与えてやっている事ができているのかハッキリしていないのに。
今更かもしれないけど、今夜電話で智香（ともか）に聞いてみよう。

――――――――帰路。
思えば、俺らは喧嘩もほとんどなかった。
恋愛において異性関係でトラブルになる事はよく聞くが、あいにく女友達と呼べる子すらもいない俺はトラブルの原因となるものがまずないし、智香は職場などで異性と関わる機会はあっても、仕事に力を入れ過ぎて俺以外の異性と仕事以外の話題で話す事自体がほとんどないと言っていたな。
こんなお互いだから、今まで大きな諍いもなく、うまくやってきたのかもしれないけど。
しかし、俺は、もう少し彼女に近づきたい。そう思っていた。

――――――――何故だろう。今日はやけに、智香の声が聞きたい。
１１月２１日水曜日。空を見上げるとこの日は満月だった。

不満と不安

「ごめんね、今日仕事長引いちゃって」

少し疲労を隠したような、無理が微妙に感じ取れる声でそう智香は言った。

電話越しでも、よく聞きとれば相手の感情や疲労など伝わってくるもんなんだな。

「いや、全然いいよ。電話大丈夫だった？」

俺らは、5年付き合っていても気の遣いように付き合い始めの当初と大差はなかった。

これが自然になっているし、流れに逆らおうとも思わない。

「で、何か話があるんだよね。何？」

そうか。そうメールを送ったんだった。

折り入って話と言うよりは、確認したい事なのかもしれないんだけど。

「あのさ、智香って俺の事好き？」

俺は自慢ではないが元々言葉を選ぶ事に関して、自覚するほど非常に不器用だ。

こういった核心に迫る状況で、遠まわしに少しずつ言葉を繋いでいくほど俺のボキャブラリーは豊富ではないし、使いこなせる頭もなかった。

・・・ホント自慢ではないが。

突然の意表をついた質問に、彼女は少しの間押し黙ってこう言った。

「・・・何か知樹君から吹き込まれたの？」

「うっ・・・」

彼女は知樹の事を知っている。
当たり前だ、俺が高校1年の時智香と付き合う事になったのを、知樹は目の前で見て知ったわけだから。
その三人で今まで接する事も多く、俺が知る限り彼女にとって異性で仲いいのは俺を外すと知樹くらいのものかもしれない。
図星を突かれ、少し言葉に詰まってしまった俺に対して軽い溜息を零し、智香は言った。

「好きに決まってるじゃん。今更何言ってるの？」

それは淡々と、かつ冷静に言った。
付き合い始めの頃を思えば、まだ初々しかったのかもしれないな。
初デートの日に、待ち合わせた時の顔を赤くしうつむいていた仕草なんて、今では考えられない。
彼女は、仕事に没頭し恋愛独特の感情を持つ事を忘れてしまったのだろうか。

「そっか・・・そうだよな。ありがと」

少し言葉を切るようなイントネーションで答えると、智香は俺の様子に疑問を抱いたのか言った。

「今日何かあったの？元気ないよ？」

少し心配気味に問いかけてきた。
寧ろ、心配しなければいけないのは俺じゃないのだろうか？

「いや、俺は何もないよ。智香は、今の仕事とかで悩みってないのか？」

ここにきてようやく、話題らしい話題を振れた気がした。
智香は、特にテンションを変える事もなく、答えた。

「ん～特にはないけど。まあ今月後1回しか休みがないし、ちょっと疲れは溜まってるかな」

これは、一応彼女なりの弱音なのだろう。
人それぞれ弱音の大きさや内容が違うと思うが、ここ数年弱音らしい弱音をほぼ全く聞いていないような気がする。
智香はストレスが溜まる事があまりないのだろうか。
いや、それはありえないはずだ。
考え過ぎかもしれないが、彼氏である俺が何の相談にも乗れずに、一方的に溜めこまれるのも後味が悪いので小さな事でも悩みを聞いてみたかった。

「ほんとに悩みってないのか？お節介かもしれないけど、いつでも話聞くからな」

そう言うと、一拍置いて智香は喋り始めた。

「悩みかー・・・強いて言えば、この前話したアレかな？仕事先の飲みで、あんまり接点ない部署の先輩があたしに話しかけてきて、あれから少し積極的にアタックしてきてるんだよね」

「遠距離で彼氏がいるって言っちゃうと弱いから、いっそ近距離って事で言っちゃえば諦めてくれるかな？」

彼女が異性からも同性からも好感が持てるのは、こういった変に気取ったりしない所からもくるのかもしれない。
メリハリがはっきりしてて、自分の意思をしっかり持ってる。
だから俺は智香の事を信用できるのだろう。
でも。

「仕事上での悩みとかはないの？まあないのが一番だけど」

嫉妬心が余程強ければ智香の話が重要になってくるかもしれないが、俺はあまり自分で思う限り束縛が強いわけでもないし、何より智香を信用しているから別段気にする話ではなかった。

「疲れるとか以外に特にないよ。人間関係だって悪くないし。何で？」

自分の言っている事に嘘はない、といった意が読み取れるほどそれはあっさりとしたものだった。
どうやら、俺の考え過ぎだったのかもしれないな。
・・・まぁ、本当は、こう言い聞かせないと自分のテンションを保てそうにないからなんだけど。
２２くらいの女の子が、親の為に掛け持ちの仕事、更に介護のボランティアまで暇を惜しんで参加してるくらいの良心の鏡みたいな存在。
こういう子と長年付き合えているのは幸せなのかもしれないが、未だにその実感がわかないというか、付き合う事で関係が変わるとかそんな浮ついたものでも想像していたのかもしれない。
現実は、やっぱり想像通りにはいかないものなんだな。

「そっか。ごめんな、ちょっと心配だったから聞いてみたくなったんだ」

これが、俺の今できる限りの優しさだった。

「んーん。ありがとうね、心配してくれて」

それから、俺達は３０分くらい他愛もない話を交わし、静かに電話を切った。

――――――――――。

俺は、何が不満なんだろう。

何が不安なんだろう。

こういう思い悩みは、今日に限った事ではない。

日常での疲れ、何らかのシリアスな文面を読んでそれに共感できる時、こういう気分に至る時に発端となっているのは必ずどこかにあるもんだ。

恋愛の定義なんかないし、ある意味どれも正解なんだろうけど、どうしても俺の中ではバランスが取れない。

相手の気持ちなんて見えないし、言ってる事と考えてる事が真逆な事だってある。

カップルの中でも毎日四六時中ベタベタしてるようなアツアツカップルもいれば、俺らのように同性の友達のように竹を割ったようにサッパリした付き合い方も、両方恋愛関係の上で成り立ってると言える。

これが不思議な所だ・・・。

結局、俺は智香の気持ちが分からないから、不安になってるのかもしれない。
行動や言葉で目いっぱい自分の感情を表現している人は、そういった悩みが発生しない可能性が高いかもしれないけど、俺らのような関係は思い悩みやすいタイプだと「何か隠してる事があるんじゃないの？」っていう気がしてならない。
特に、智香は自分を追い詰めたりストレスを溜め込んだりする所があるのは知っているから余計にその傾向が強いだろう。
相手の気持ちが分からないから、「考え過ぎ」っていう事すらも分からないけど・・・
うーん・・・今日はちょっと本を読み過ぎたかな。
これ以上あれこれ考えても仕方ないな。今日は寝るか。

智香は、仕事や一人暮らしの生活で忙しい中時間を割いて俺と話してくれたんだ。
それだけで良しと思わなければならないな。
俺は贅沢を言ってる。

さて・・・寝るか。
俺はケータイのアラームをセットし、消灯した。

――――――――――――――――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6169y/

半分の世界で

2011年11月21日14時30分発行